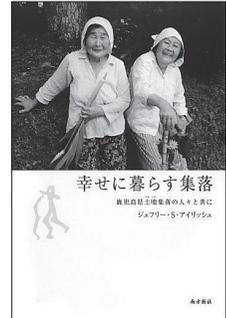


くらしと協同の本

ジェフリ・S・アイリッシュ著
『幸せに暮らす集落
鹿児島県土喰れ集落の人々』

【BookData】

発行 南方新社 2013年1月 215ページ
値段 1,800円+税
ISBN : 978-4-86-124250-2



評者：熊崎 辰広 (当研究所研究委員)

「鹿児島県薩摩半島の山奥に、土喰^{つちく}れという小さな集落がある。山に抱かれる二十軒の家とたった27人でできている一つの世界。65歳以下は私を入れて3人だけ。平均年齢は77歳。」

こんな風に始まるこのルポルタージュは、一人のアメリカ人がこの土喰集落に居を構え、やがて小組合長としての役割を担いながら、集落の人たちとの交流を描いたもの、主として南日本新聞に『風の通る道』『小組合長日記』として連載された文章をまとめたものである。

土喰集落27人の内、男性は8人で女性は19人、高齢化率は89%に達している。「限界集落」として、かなり危機的な状況を示している。この「限界集落」という言葉は、1988年高知大学の野見氏が、山村の集落分析として定義したもののだが、「65歳以上の高齢者が集落人口の半分をこえ、独居老人世帯が増加し、集落の共同活動の機能が低下し、社会的共同生活の維持が困難な集落」と定義されている。しかし、それから20年ほど経過した現在、高齢化の推移によって消滅した集落はないという報告(山下裕介『限界集落の真実』)もあり、事実本書で示された土喰集落のくらしの内容は「限界」という言葉で定義されることの危うさを示している。集落のほぼ全員がカタカナの名前で登場す

る。筆者自身はジェフさん(ゼフさん)で、はじめから外国人としての違和感もなく、自然に受け入れられたという。「外国の者が小組合長になっていることの不思議さと、多分それ以上いつの間にか自分が社会の中の一員になっていることの実感だった。」

具体的に名前呼び合うことによって生まれるコミュニティとしての一体感。ここでは決して「孤独死」などはありえない。

「今以上に行政と地域が力や知恵、お金を出し合っていけば、皆ここでの生活を続けることができるだろう。住み慣れた家や集落で、隣近所とおしゃべりをしたり、先祖やなくなった家族のお墓参りをしたり、畑を耕したりして高齢化率89%の土喰の人々にとって、いろいろな人や組織に支えられながら、最後まで自分らしく生きることができる。」という実感は、また次のような述懐にもつながる。彼にはカリフォルニアの田舎に帰るという選択もあったはずだ。「ここ(カリフォルニア)には住めないと思った。土地は広くてきれいだ、家と家との間が開きすぎていて、共同体(コミュニティ)の温もりは感じられない。日本の田舎は家も土地も手入れが行き届く広さ。それに手を伸ばせば隣近所に届くので、お年寄りはお互いに助け

合えるのだ。」彼は日本人の妻をむかえ、すでに二人の子供と暮らしている。

彼の農村を見る眼差しには、民俗学者宮本常一から学んだことが多いようだ。彼は宮本の著作である『忘れられた日本人』を英訳しており本書では次のように指摘している。「宮本の本の中の風景や村社会は、土喰集落と共通するところが多い。集落をあげての共同作業や寄り合い、自然界に対する迷信など、本の中の世界と今の生活が大きくかわっていないように感じるのだ。」しかし、それは土喰集落に限らず、多くの日本の農村に共通に見出すことができるように思える。

私が今関係している岐阜県の『生屋集落』（熊本大学徳野貞雄氏の提唱している『T型集落点検活動』を実施中）は、15戸（空家も17戸ある）人口25人（男12人、女13人）高齢化率88%と、ほぼ土喰集落に近い。ここでも高齢になっても自立した生活のできる元気な人たちや日常的なにげない助け合いの様子が土喰集落と同じように見られるのだ。部落にある墓碑には「安政」と表記され、190年以上の歴史があり、かつては木材で栄え、蔵のある大きな家が目立つ。兵役の経験や満蒙開拓にかかわっている人たちがいるのも、土喰集落の人たちと共通し、戦争の影は彼らの人生に大きな影響を与えた。

土喰集落は約240年の歴史がある。昭和27、8年までは茅葺きの屋根であり、その屋根の葺き替えは、集落全体の共同作業として「結」のところで続けられていた。必要な道路の普請などもそれによって作られ維持されてきた。そんな「結」の精神は、集落に生きる人たちの心の中に生きていくのかもしれない。

たとえば、本書の後半に登場する、カズコさんのこと。彼女はつい最近86歳になる夫のタケオさんをなくした。タケオさんが戦争から帰った後、結婚し、長い夫婦生活をこの地で過ごした。宮崎に住む娘さんから同居をすすめられているが、住み慣れたこの地を離れたくない

という。同じような例を私は岐阜の集落点検で経験している。集落から少し離れた北辺にある平屋の小さな家に住む90歳のKさんに始めてお会いした時にはまだ夫も健在であった。満州で結婚し、悲惨な帰還体験を経て帰郷し炭焼きをしながら子供3人を育て上げた。長男の家には夫婦が住むべき部屋もあり、毎年冬場にはそこで過ごしていたが、夫がなくなり一人になると冬場でも移動することなく、一人暮らしを続けている。カズコさんと同じだと思う。それにしてもなぜ彼女たちは、一人暮らしを続けようとするのだろうか。それは次のような記述にヒントがあるのかも知れない。

「…集落の支え合いもよくできている。まだ若い70代のヒサコさんは、ミチコさんの家に毎朝行って、痛いところにシップを貼ってあげている。幹男さんが退院した日には、ヨシさんがお祝いにソバを打って迎えた。買い物が必要な時は、リョウコさんや幹男さんが車で連れて行ってくれる。お墓や畑、家の勝手口で、お互いのその日の調子を語ったり、励まし合ったりしている。誰かに頼まれることもなければ、ボランティア意識もない。後輩は先輩を見守り、強い人は弱い人を自然と支えるようになっている。」

しかし、そうであっても死は自然に訪れる。最初のころは8人いた男性の内4人、女性2人と合わせて6人が亡くなり、27人の人口が21人になり、やがて集落の消滅へと流れるのであろうか。

「年を取って亡くなることは、とても自然なことだ。多くの身内や親戚、友達を見送って来た集落の仲間たちは、…新たな死を静かにうけとめ、自分の番をまつ。…生きることは、とても大きなことであり、且つ小さなことでもあるような気がする。…いずれ死ぬと思えば、今を素直に、今日を大事に生きないともったいないという気持ちが湧き上がる。」

人々に生きる意味を与え、幸せにする土喰集落のような共同体の価値をもっと評価すべきではないか、本書はそれを強く示唆しているのである。